

## 山里カフェ

# 安心拠点、見守り、励まし、おしゃべりの場

池谷 啓 ●特定非営利活動法人楽舎 理事長



空中サロンのような交流広場

### 要旨

- ①過疎高齢少子化の著しい山里で、多世代型の交流広場をつくっていく。人と人とのつながりによって互いのサポート、安心、力づけとなっていく。過疎地ゆえに、人との出会い、語り合いの場が望まれる。
- ②その試みとして、多目的語らいのスペースをつくった。お年寄りたちの身の上話、ひとり暮らしの不安などの語り合い、そこに子育て中のお母さんと幼児が加わっての多世代の交流の場となった。
- ③山里の豊かな資源として、炭焼き窯による竹炭づくり、杉の丸太のスウェーデントーチなどの燃焼実験を通しての語り合いを持った。布絵や紙漉きの展示と体験会を開催した。また、山繭の飼育のための栗林の網かけを行い、山繭の飼育をした。
- ④コロナ禍などもあり、田舎暮らしを希望する人たちの移住相談を受けるようになった。年度内に3組(6人)が移住した。

### 1. 背景と目的

- ①「**過疎高齢化**」～山里(浜松市天竜区春野町)の過疎高齢化は著しい。人口は1950年代の5分の1。この10年で25%減。ひとり暮らしの高齢者が増え、若者や子どもは少ない。
- ②「**買い物難民**」～店もなくなり買い物難民が増える。コロナ禍のために人々は孤立化してゆく。お年寄りは行く所がない。気楽に語り合える場がない。
- ③「**子育ての負担**」～山里は豊かな自然があるが、子どもは少なく(幼稚園は、年長組4名、小学校1年は7名)、子ども同士で遊べる機会が少ない。親戚や縁者のいない移住者の家庭など、子育ての母親には負担がかかる。移住者と地元の人が交流する機会が少ない。まちなかの人と地元の人が交流する場がない。
- ④「**多世代交流の場**」～世代、職種、地域を超えた人と人の交流のきっかけがほしい。行き場・語らいの場があることで、コミュニケーションが生まれて活気が出る。
- ⑤「**定住促進**」～過疎地の魅力発信につながる。まちなかの人が移住するきっかけになる。移住者の定住促進につながる。

### 2. 活動の方法

- ①「**山里カフェ**」をつくる。多世代が交流する



子育て広場として



寒中に、紙漉きのワークショップ

おしゃべりの場とする。見守り・看取り・送り、育児の体験の分かち合いなど。

②放置された竹や間伐材を活用して語り合いの場をつくる。また、近くの古民家を整理して寄り合いの場とする。

③子どもたちの遊び場をつくる。

### 3.現状の成果・考察

①「山里カフェ1」～杉の丸太を活用して、寄り会える場をつくった（浜松市天竜区春野町気田961-1「みんなの家」に隣接）。近くに清流の気田川が流れ、堤には桜が満開となる。5月にはホテルが現れる。キッチンと薪ストーブ、フロアをつくった。さらには高床式のくつろぎスペースをつくった。靴を脱がずに気軽に語り合える場となった。およそ30畳のスペースである。

②「山里カフェ2」～理事長所有の古民家を活用して、寄り合いの場をつくった。インドに数年間滞在していた日本人夫婦が、帰国して2カ月滞在。飼い犬が年寄りに飛びかかってケガを追わせて損害賠償のために土地と家を売却せざるを得なかった方などに1カ月間滞在してもらった。

③「多世代外交流」～通所介護施設の利用者、スタッフと友人たち、私設図書館「まほろば文庫」、ひとりの暮らしのお年寄りの方（80代）が交流。見守り、看取り、送り、先祖供養などの話。そこに子連れのお母さんが来訪して、

老若男女の交流の場ともなった。山里には保育所がないので、市の「保育ママ制度」を活用して、音楽教室を定期的に開催。過疎地の買い物支援「便利屋猿ちゃん」に毎週来てもらった。

④「イベント」～新型コロナウイルスのまん延防止等重点措置の制限があったが、近隣の人、お母さんと子どもたちなどが立ち寄ってくれた。2月には布絵作家（竹山美江さん〔86歳〕）、和紙作家（93歳）の作品展示とトークイベント、紙漉き体験会を行った。

⑤「移住相談」～山里への移住相談に対応した。育児中の家族、山里でビジネスをしたい人、ハウシックの人、電磁波障害のために苦しんでいる人、山里で林業をしたい人、愛犬が通行者と事故を起こして損害賠償で土地と家を売らざるを得ない人など、山里暮らし、田舎暮らしの移住相談があった。実際に3組（6名）の移住があった。

⑥「杉、竹の活用」～古い炭焼き窯を復興させた。山火事防止のために60年余の杉の大木を7本伐採。杉はスウェーデントーチなどに活用。竹炭、スウェーデントーチなどの燃焼実験を重ねた。300本ほどあった孟宗竹と真竹の放置竹林を整備。竹炭にしたり、竹チップで粉砕して堆肥とした。

⑦「山里の90代の元気なお年寄り」～多くの出会いがあった。88年間、1日も休まず日記を書き続けている96歳の男性、90歳の現役の鍛冶屋、現役の商店主の99歳の女性、日々マンダラ塗り絵とお経を欠かさない96歳の女性、森の中のひとり暮らしの家が地域の語り合いの場になっている93歳の女性、木を伐採して地域を明るくする92歳の男性など。



近隣の人、子どもたちがくつろげる場